

昭和初期における柳田国男の方法論とその受容

—新潟県での郷土誌・史の記述を事例として—

Yanagita Kunio's Methodology and its Acceptance
in Early-Shouwa Period

矢野 敬一
YANO Keichi

（平成十六年九月二十九日受理）

はじめに

柳田国男の研究方法は、全国各地にいる民俗事象に関心のある者を組織し、そこから得た膨大な資料を通して研究するものだったとしばしばいわれる。手紙や雑誌への投稿を通して資料を提供する側と、それを利用する柳田といった分業体制が敷かれていたという理解は一般的なものでだろう。

だがそうした理解からは見落とされる側面があることも、ここで言い添えておかなければならない。第一にこうした図式では地方にいる民俗事象へ関心を寄せた者が、柳田の方法をそのまま受け入れ調査報告を重ねていっただけの受け身な存在としてしか位置付けられていない。そもそも柳田の方法自体がどれだけ受容されていたのか、ということがここでは見落とされている。柳田の提唱した方法がどのように受容され、そしてそれぞれがいかに対応していったのかということもまた、問題とすべきであろう。次いで柳田が民間伝承の会を通して組織化を図っていた時期は、学校教育の場面では郷土教育へ関心が寄せられていた時期で

もあつた。郷土に対して多様な問題意識から対象化しようとする試みが展開しており、柳田の取り組みもそうした動向の中で位置づける必要がある。

本論文は昭和初期の新潟県を対象として、当時高揚していた郷土への関心が具体的にどのような形で郷土誌・史へと結実し、またそこでは柳田の方法はどのように受容されていったのかを論じる。メディアがそれ以前とは比較にならないほど多様化していったこの時代は、また教員層を中心に「郷土」の歴史に対する新たな関心を呼び起こしていった時代でもある。『越佐教育雑誌』には明治四四（一九一一）年以降、大正初めにかけて郷土科に関する文章が相次いで掲載されていた。その後、昭和に入って再び郷土教育への関心が高揚する。新潟県教育会では昭和七（一九三二）年から郷土教育研究会を毎年開催し、この翌年には郷土教育に関する懸賞論文を募集するといったように、その振興を図っていく〔新潟県教育百年史編さん委員会 一九七三 四五六〜四六〇〕。ここでは新潟県の西頸城郡と小国地方とで刊行された郷土誌・史を具体的な事例として取り上げることにした。

最初に取り上げるのは『西頸城郡誌』（以下『郡誌』と略記）と今ひと

つ、第一回日本民俗学講習会に参加した教員が主導した『新潟県西頸城郡郷土誌稿 第一輯 口碑伝説篇第一冊』およびその『第二冊』(以下、両者を一括して『郡郷土誌稿』と略記)である。共に当時の教員たちによる調査、記述による成果である。この二つを『古事記』にも登場する奴奈川姫の記述を比較することによって、双方の郷土史への関心の所在の違いを論じる。奴奈川姫は『古事記』に登場し西頸城郡に居を構えていたとされ、また姫に関する伝説も郡内に広く分布していた。だが奴奈川姫に関する記述を見ると、この二つの郷土誌・史はおよそ異なった姿勢をとる。次いで本章が取り上げるのはこの『郡郷土誌稿』以降、新潟県では柳田の提唱した方法はどのように受容されたのか、その具体的な成果を通して検証することである。第二回日本民俗学講習会に参加した教諭、長谷川正が中心となって編纂された『小国郷土誌』をここで取り上げ、この問題を論じる。

なお以下、取り上げる奴奈川姫の漢字表記だが「沼河」と「奴奈川」等がある。前者は『古事記』での、後者は『延喜式神名帳』記載の神社名、奴奈川神社の表記による。本稿では引用する資料の表記にしたがって、この両者を使い分けることにする。また一般的に記述するときは、当時の伝説での表記や神社名を勘案して「奴奈川」と表記する。

一 奴奈川姫伝説をめぐる記述とその比較

『郡郷土誌稿』が刊行されたのは昭和一一(一九三六)年とその翌年のことである。この二冊は西頸城郡教育会編集とあるが、実質的には昭和一〇年に民間伝承の会主催の民俗学講習会に出席した教員、青木重孝の手になるものである。柳田国男の強い影響の下に編まれたこの伝説集は、それまで県内で刊行されていた多数の郷土誌・史と比較した場合、

伝説の資料的扱いという点で、明らかに異なった姿勢を見せる。『郡郷土誌稿』での伝説の資料的扱いは、現在の観点から言えば違和感なく受け止められるものだ。だが後述するように、当時の『民間伝承』や『高志路』誌上の書誌紹介欄では、従来とは異なった新たな方法論に依拠している点が評価の対象となった。一方、この書が上梓される六年前、昭和五年には『西頸城郡誌』が刊行されている。この二つの郷土誌・史を比較対照することによって、改めて当時の柳田の方法論が担っていた意義を明らかにするとともに、それ以前の郷土誌・史での歴史認識構築に作用していた政治的力学を浮かび上がらせることにしたい。

西頸城郡内に広く分布しているのが、奴奈川姫をめぐる伝説だ。姫をめぐる記述が登場する初出は『古事記』上巻で、八千矛神の求婚相手として登場する。「此ノ八千矛神、高志国之沼河比売を婚か將ト、幸行しし時、其ノ沼河比売之家に到リ」、以下、歌の応酬という流れだ(読み下しは岩波書店『日本思想大系』による)。内容はこれだけで、沼河姫が住まう場所も「高志国」としか、文面からはうかがえない。『古事記』の記述それ自体は西頸城郡との関連とを示すものではない。文書の上で西頸城郡と姫とを結びつけていくのは『延喜式』の神名帳で、頸城郡一三座の一つとして奴奈川神社の名前が見える。実際、郡内には姫にまつわる伝説が数多く存在していた。だが西頸城郡内に延喜式の時代から連続と続く奴奈川神社が昭和初期、あったわけではなく、その特定自体が問題となる曖昧な状況であった。

そうした状況の下で『西頸城郡誌』と『西頸城郡郷土誌稿』の両者は、どのような記述をしていたのだろうか。まずこの二つの書誌的な背景を簡潔におさえておく。『西頸城郡誌』は西頸城郡教育会の手によって昭和五(一九三〇)年に刊行。郡内では明治四三(一九一〇)年に主に糸魚川町周辺の教員を中心に西頸城郡郷土研究会が結成された。会員の数は

多いときは七〇名を超えて、郡内の小学校教員の過半数に達した。大正九年に休会状態に到るまで年に二回、総会を開き、また『西頸城郡郷土史料』を第七輯まで発刊。会の地理歴史部長として活躍したのが糸魚川町長の中川直賢である〔西頸城郡教育会郡誌出版部 一九三〇 六四二〕。その中川が収集した資料を中心として郡誌を執筆したのが徳谷湖北で、大正九年には原稿は仕上がっていた。だが実際の刊行までは時間を要し、若干の補充のもとに上梓されたのは昭和五年のこととなった〔西頸城郡教育会郡誌出版部 一九三〇 序〕。刊行こそ昭和に入ってからだが、これは大正時代の郷土をめぐる知の水準に規定されたものといわねばなるまい。全体が大きく「地理篇」「歴史篇」「社会篇」と三分され、総ページ数八〇〇近い浩瀚な書である。

他方、『西頸城郡郷土誌稿』は第一冊が昭和十一年、翌年に第二冊が刊行の運びとなる。副題が口碑伝説篇とあるように、これは郷土誌全般の記述ではなく主に伝説を対象を絞ったものだ。こちらも西頸城郡教育会が刊行。とはいえその編集方針は先の『郡誌』とは大きく異なる。第一冊の序文は「従来の文献による郷土誌に対して、我々は新に伝承による郷土誌を編まうとするのがこの企でありました。(中略)この土に住みついてある年寄たちの伝承の中から、我々名も無き辺土の民どもの、長い長い生活の歴史を汲み取らうとするのが、この企の目的であります」と、従来にない郷土誌を目指すことを謳う〔西頸城郡教育会 一九三六 序〕。序文末尾には、終始指導を惜しまなかったという事で柳田国男への謝辞も掲げられている。民俗学的な観点からの郷土誌作成が目指されていることがここからは明瞭だ。各冊百ページ台半ばほどのページ数で、「樹木の話」「石の話」以下、一一の項目で全体が章立てされている。

昭和五年刊行の『郡誌』で奴奈川姫を取り上げているのは「歴史篇」の第二章太古時代で、「大國主神と沼河姫」という項目がそれにあたる。

まず「歴史篇」全体の章立てを見ることによって、『古事記』に登場する沼河姫の位置付けをおさえない。章立ては全体で一一、構成は「第一章 石器時代」「第二章 太古時代」「第三章 王朝時代」「第四章 平安朝時代」「第五章 鎌倉幕府時代」「第六章 建武中興」「第七章 足利時代」「第八章 謙信公及景勝公時代」「第九章 徳川時代」「第十章 清崎藩」「第十一章 明治、大正時代」といったもので、時代区分の大枠は日本全体の歴史でのものとはほぼ同じである。唯一、第八章が第一節で「北越人士発展時代」と題され、「所謂謙信公時代にして我北越人士未曾有の活動発展時代なり」とある点に、地域の独自性が打ち出されているにすぎない。

各時代は具体的にどのような記述されているのかを端的に示すのが、各章の構成だ。章ごとにいくつかの節に区分された記述を見ると、各節の見出しの多くが当時の為政者の名前をそのまま記載したものである。たとえば「第五章 鎌倉幕府時代」は「一、宮崎定範」「二、里見氏」「三、新田氏」「四、越後守護」といった具合で、それぞれ為政者の事績が記される。また「第八章 謙信公及景勝公時代」では上杉謙信とその家臣の動向が主たる記述内容だ。『郡誌』は当時を「未曾有の活動発展時代」と位置づけ、「謙信公時代に於ける中頸城郡春日山城は東北日本政治上の一大中心点たりしを以て我西頸城郡の如きも自ら其勢力圏内に入り地理上本郡に於ける謙信公の部下は主として越中以西征服のために備へられしもの如し」と述べる〔西頸城郡教育会郡誌出版部 一九三〇 二二〇〕。次いで勝山城とそこを居城とした謙信の家臣、須賀修理亮の名前以下、合計五つの城が列記される。以下、この各城単位で節が並び、武将たちの動向が紹介されていく。『郡誌』「歴史篇」の歴史記述を構成していく論理は、時代ごとに西頸城郡を統治していた為政者の事跡を積み重ねて記述していくことよって、歴史像を構築しようとするものである。

奴奈川姫をめぐる記述も、こうした歴史記述の論理に即したものであ

る。「第二章 太古時代」が描き出す具体的歴史像は、『古事記』にある
 大国主命と沼河姫の郡内での動向だ。沼河姫の居所は、『古事記』ではた
 だ「高志国」としかない。また記述自体もごく短いものではない。だ
 が『郡誌』の筆者は、数少ない手がかりから西頸城郡と姫とのかかわり
 を描き出そうとする。まず『延喜式』に奴奈川神社が記載され、かつ郡
 内に同名の神社があることから「奴奈川姫の居所も亦大体上本郡内の一
 村落なりしこと明かなり」という。だが「式内沼河神社の所在に就ては
 今尚明かならず」というのが実情であり、「猶未だ確定するを得ざるは洵
 に遺憾なり」として関係する諸説が紹介される。たとえば『大日本地名
 辞書』『西頸城郡郷土研究資料第四輯』他の一節が照会され、さらに筆者
 自身の聞き取りも加わる。また郡内にいくつかある奴奈川神社について
 も、その来歴が吟味されていく。たとえば田伏村に所在する奴奈川神社
 について筆者は「其地形を見るに太古の遺跡も認められず、社記亦巧に
 作為せしものと雖も其体已に古文に非ず」といった見解を述べ、式内社
 ではなかったらうと判断している。結局、「沼河郷が大体上今の西頸城郡
 たる以上は、延喜式奴奈川神社が本郡内に在るは明かなり」としつつも、
 その所在は「今容易に確定すべからず」という結論に落ち着く〔西頸城
 郡教育会郡誌出版部 一九三〇 一九〇〜一九四〕。

だが探求はそれに終わるものではない。何はともあれ奴奈川神社とい
 う社名を持つ神社が郡内に存在すること、さらに姫に関する伝説が分布
 することから、姫が「我西頸城郡開拓に密接なる関係あるは否むべから
 ず」と筆者は述べる。続けて「伝説は読んで字の如く古来の民間説話に
 して必ずしも史的事実として取扱ふことを得ざれども、亦以て遙遠なる
 奴奈川姫の當時を追想するの資に供すべからずとせんや」として、以下、
 関係する伝説の紹介に紙面を充てていく。合計一ほどの伝説が『西頸
 城郡郷土研究資料』『大日本地名辞書』『越後風俗志』他から引用される。

大半の伝説は、たとえば「伝へ云ふ奴奈川姫福来ケ口に住みて機を織り
 布を布川に晒されし」といったように簡潔なものだ。だが断片的な伝
 説がより合わされ、奴奈川姫と大国主神との関係がナショナルな歴史へ
 と結び付けられていく。本節の締めくくりに近い部分は「大国主神と沼
 河姫との結婚提携によりて是等出雲文明が夙に我西頸城郡地方に移植せ
 られしこと敢て強ちに架空の事となすべからざるなり」とあり、古代に
 おける出雲地方との関係が強調される〔西頸城郡教育会郡誌出版部 一
 九三〇 一九五〜一九八〕。

明治三〇年代に入り国定教科書の第三次改定にともない、教科書には
 原始社会の項に代わって神代が歴史として必ず掲載されることになる。
 近世の解釈を通して獲得された物理的合理主義の一般化、およびそれを
 許さない体制側の記紀観というのが、近代の新たな記紀解釈の構図だと
 『磯前順一は図式化する』〔磯前 一九九八 一一四〕。奴奈川姫を实在視す
 る『郡誌』での記述は、こうした公定の歴史観に依拠したものだといわ
 ねばなるまい。だがここで確認しておきたいのは、史料的な面で実証が
 可能となる時代の記述と同様、古代の記述においても奴奈川姫と大国主
 といった固有名を持った人物に焦点を据えて歴史像が構成されている点
 である。さらにそうした歴史像構築にあたって、限定的かつ補助的では
 あれ、伝説が資料として用いられている点だ。この二つは『郡郷土誌稿』
 での奴奈川姫伝説の取り扱いを見た場合、とりわけ注意される問題とな
 る。以下、述べるように『郡誌』と『郡郷土誌稿』との二つの郷土誌・
 史の相違は、磯前が描き出した図式とはまた異なった図式のもとに位置
 付けされるものだ。

他方『郡郷土誌稿』ではどのように奴奈川姫伝説は取り上げられてい
 るのだろうか。第一冊、第二冊両者あわせて奴奈川姫に言及する伝説の
 数は合計一二。とはいえ姫に関する伝説が一箇所にとめられているわ

けではない。先に記したように、本書は伝説を「樹木の話」「石の話」「水の話」以下、何らかのモノ、場所を指標とした分類で章立てが構成される。奴奈川姫関連の伝説は、ここでの章立てでは「水の話」「塚の話」「地名の由来」「石の話」「山の話」「社と寺の話」のそれぞれに分かれて収録されている。

その内容を見ると、『郡誌』での記述の方向とは大きな隔たりを見せる。隔たりの一つは異伝の存在が併記されていることである。西海村の飯塚にまつわる伝説は、大昔この地に住んだ奴奈川姫が使用した食器を埋めたところであるというものだ。別の一説として義経に従ってこの地を通った弁慶が、小山のように土を盛って投げつけて塚ができたという伝説も『郡郷土誌稿』は併記する(第一冊、二六ページ)。奴奈川姫が登場するということが、伝説の伝わる土地では必ずしも特権的な扱いを受けているわけではないことが読み取れるような記載に、ここではなっている。

次いで『郡誌』での奴奈川姫の記述との隔たりは、姫のいた時代については特に言及されていないか、あってもたんに「昔」といった漠然とした過去としてしか、記述されていないことだ。『郡誌』でのそのような姿勢が、ここにはない。むしろ伝説が語られる具体的な場面で明確な年代が口にすることはまずないだろう。そうした実際の語られ方がそのまま、読み手に伝わるような記述を編者はとる。

さらに『郡郷土誌稿』掲載の伝説を見ると、時として『古事記』での記述とまったく整合しない内容があることに目を向けておきたい。銚ヶ嶽という山の地名の由来を示す伝説は、「昔奴奈川姫が、大国主命を嫌つて、能生谷村字柵口の山奥へ隠れ所持の銚を地に埋められたので、その名がついたといふ」(第一冊、五六ページ)というものだ。また奴奈川姫の夫が大国主命と争い、最後には斬首されたという伝説も掲載されてい

る(第二冊、七〇ページ)。大国主神と奴奈川姫との敵対関係を示すような内容は、いうまでもなく『古事記』にはまったくない。さらに伝説の大半では奴奈川姫だけが言及されており、大国主神とあわせて登場するものは先の敵対関係を示すもの以外、本書には収録されていない。『古事記』での記述と、今実際に語られている奴奈川姫の伝説とは別個の次元にあり、伝説を文字記録とは異なる独自のものとする編者の姿勢がここからは読み取れる。

『郡誌』でも奴奈川姫に触れた伝説を紹介していることはすでに述べた。だが『郡郷土誌稿』にある大国主神と敵対する内容のものは、そこにはない。逆に奴奈川姫との婚姻が取り上げられ、「両神の結婚は畢竟するに当時西頸城郡地方に於て勢力を振はれし奴奈川家と出雲民族の首領である八千矛神との政治的提携」だと位置づけられる。奴奈川姫は「古代社会に見らるる母系酋長」なのだ(西頸城郡教育会郡誌出版部 一九三〇 一九六)。「古事記」に記された事象が西頸城郡の古代史としてより整合的に再構成されるよう、後世の文書や伝説が配置されていくのを『郡誌』の記述からは読み取ることが出来る。ここでは奴奈川姫の実在自体は問われることはない。実在を前提とした上で姫と大国主を主軸に据えた統合的な歴史像の構築が図られていく。そうした記述は『郡誌』の古代以降の歴史記述の方法、すなわち各時代の為政者を主とした人物の動向をもって時代像を描き出すという方法と共通し、一貫したものだという点にここでは目を向けておきたい。

他方、『郡郷土誌稿』での奴奈川姫伝説の記述は、『古事記』との関係性をことさら強調することはない。姫に関係する伝説が一箇所にまとめられているわけでもなく、また『古事記』の内容と矛盾するような伝説も収める。その意味で伝説の登場人物の事跡自体を重視してそのまま史実に結びつける姿勢とは一線を画す。だが伝説を収集することが歴史の

再構成と無縁だと編者が考えていたわけではない。すでに触れたように『郡郷土誌稿』の序は、「名も無き辺土の民どもの、長い長い生活の歴史」を汲み取ることを目的とする、と述べているのである。『郡誌』がとったような歴史記述ではなく、従来とは異なつた観点からの記述が本書では目指されていた。

二 『西頸城郡郷土誌稿』の成立とその意義

あらためて『西頸城郡郷土誌稿』の成立とその意義について、当時の柳田国男とその周辺の動向に関連付けて触れていくことにしたい。

『郡郷土誌稿』での伝説の収集事業は教育会でなされたが、最終的な調整、編集作業は当時、河原田高等女学校教諭であつた青木重孝の手になるものである。青木は明治三六（一九〇三）年、現糸魚川市の蒲池に生まれ、糸魚川中学校卒業と同時に大正一〇（一九二一）年、西頸城郡青海小学校の代用教員となる。その後、小学校本科正教員免許を取得、さらに中等教員試験の国語科、漢文科に合格した。当時の西頸城郡および佐渡での民俗学の動向については、松本三喜夫が『野の手帖』で「越後国糸魚川と佐渡のこと 青木重孝と『西頸城郡郷土誌稿』」と題して一章を設けており〔松本 一九九六〕、また佐渡に転動になつた青木と民俗学とのかわりについては同じく松本の『柳田国男の民俗誌』に記述がある〔松本 一九九八 一六五〜一七三〕。

青木が郷土研究に踏み込んだ契機は、再び青海小学校に転動となり、その後校長に赴任してきた山崎甚一郎との出会いからである。青木の回想によれば、昭和一〇（一九三五）年、西頸城郡郷土研究会の事業として郡の口碑伝説集を作るよう、山崎から指示があつたという。そこで懇意であつた相馬御風に相談したところ、東京で開かれる柳田国男の民俗

学講習会への参加を勧められる。昭和一〇年のこの第一回日本民俗学講習会に参加した折、青木はアチック・ミューゼウムを見学したり、折口信夫や金田一京助らとともに柳田邸を訪問、伝説の集録についての指導を受けた。さらに隣県である長野県の『北安曇郡郷土誌稿』を入手、口碑伝説集の正本とすることにした〔青木 一九九五 三五〕。

講習会での座談会速記録を見ると、青木は「一昨年から郷土研究会といふものが組織されて、今年が三年目でありますので一層強固にしよう」といふ訳で、全郡の小学校教員中等学校教員、有志者が会員となつて、その事業を着々進めたいといふ計画で居りますが、まだ仕事の見るべきはありません」と発言している〔柳田編 一九三五 四〇二〕。大正期に一度中断となつていた郷土研究会の活動が、当時、再開しつつあつた。その事業の一つが、いうまでもなく郡内の口碑伝説の収集、刊行であることはいうまでもない。なおこの講習会に新潟県から参加したのは青木ともう一人、新潟市の小林存である。小林は雑誌『高志路』をこの年、創刊。講習会にも持参して青木に手渡し、新潟県での民俗学を発展させるべく熱く語つたという〔青木 一九六三 二二〕。民俗学講習会への参加で青木は柳田国男、さらに小林存と出会い、民俗学への関心を一気に深めることとなる。

青木が参考とした『北安曇郡郷土誌稿』は信濃教育会北安曇部会の編集になり、『第一輯 口碑伝説篇第一冊』が昭和五（一九三〇）年五月、『第二輯 口碑伝説篇第二冊』が同年一二月に郷土研究社から刊行されている。その後『第七輯 口碑伝説篇第三冊』が昭和一二年に上梓されており、一志茂樹による巻末記からは調査の経緯が読み取れる。それによれば昭和二年に設けられた郷土科研究委員会の席上で組織的な郷土調査の必要が叫ばれたのが、その契機となつたという。これは柳田国男も関わつた調査として大正七年の郷土会「内郷村調査」、信濃教育会東筑摩教育部

会の『東筑摩郡誌別篇』編纂事業、同諏訪教育部会の『諏訪史』編纂事業といった、大正中期に始まる一連の郷土調査の一環をなす。时期的にはいわゆる「山村調査」と重なり、「一国民俗学」の構想と連動して学史の上で大きな転換点となったものだ〔伊藤 一九九 二五六〕。

『北安曇郡郷土誌稿』としてまとめられることになる調査が実際に開始されたのは昭和四年に入ってからで、まず民間伝承に関する調査から始めることとし、具体的には口碑伝説と年中行事を対象とすることにした。この二つを選んだのは「比較的採訪に容易でもあり、且つは過去の人生の姿の裡に吾吾の生活が抛つて展開してゐる相を見究める為にも比較的分りよいと思つたから」である。口碑伝説の調査の中心役となつたのは、一志。調査にあつた最大の困難は、調査範囲の確定という問題だった。たとえば口碑、伝説、昔話、物語、民譚、史話それぞれの内容に厳密な区分があるわけではなく、結局ありのままの形でこれを採訪せざるを得なかつたと一志は回想する。さらに分類にあつても柳田の教示にしたがつて全体を一四の題目に分けたものの、分類がたいものをあえて分けたのだから不徹底の謗りは免れないと、反省の弁を続ける〔一志 一九三七 二七八〕。

長野県では大正六（一九一七）年から柳田の指導を得て『東筑摩郡誌別篇』の編纂が着手されて以降、柳田の指導による郷土調査や講演が県下各地の教育会によって競つてなされるようになっていた〔胡桃沢 二〇〇四 二八五〜三九六〕。一志は事前に柳田国男を訪問し、調査上の指導を受け、さらにその結果をプリントにして各地方委員宛に通知した。調査上のポイントは主だったものでも二五を数える。先の「巻末記」からいくつか引用しよう。その冒頭には「伝説を採訪するにはその標準をもの名前に置くことが効果が多い。例へば石にしても、赤子石とか、袂石とか、名前の附いてゐるものを先づ捜し求め、続いてその由来を尋

ねの類である」という項目が示されている。具体的な何らかのモノを手がかりとして伝説を調査する手法は、そのまま伝説の分類方法へとつながった。『北安曇郡郷土誌稿』での「口碑伝説篇」の分類は、「一、山の話」以下、「池、淵、泉の話」「石、地蔵、石塔等の話」「塚の話」「地名の由来」「樹木の話」「社と寺の話」他といったように、伝説が関係するなんらかのモノを指標とした区分が中心となっている^②。また「その伝説の分布してゐる範囲、又如何なる方面に伸びてゐるか、その幅と動いていつた姿とを知ることが大切である」「伝説に就いてはなるべく多くの数の上に立つて研究を進めることが大切であつて、結論に急ぐことは最も忌むべきことである」といったように、伝説研究の基本的方向性について触れた項目もここで提示されている〔一志 一九三七 二八〇〕。一地方での調査ではあるが、柳田国男の方針の下に体系的になされた最初の伝説調査としてこれは銘記すべきであろう。

ここで示された伝説の位置付けが当時、いかに斬新なものであつたかは、それ以前に刊行された伝説集を見ることによって、より鮮明なものとなつてくる。新潟県内での伝説集をいくつか取り上げよう。明治四一（一九〇八）年刊行の『越後伝説四十七不思議』は、県内の不可思議な現象にまつわる伝説を取り上げ、その実態を科学的に解明しようと試みたものだ。その緒言で筆者は「旧来の迷信を打破し、一方には新思想の養成を計らんことを試み」るために本書をまとめたと記す。序文を寄せた早稲田大学図書館長・市嶋謙吉も「不思議での伝説の夥しきは一面土地の古くして広きことを立証すると同時に多面迷信の多きことをも表彰するものと申すべく取りも直さず其住民の無知蒙昧を白状する者に候」と述べる〔中原 一九〇八 六〇八〕。伝説の内容は「旧来の迷信」であり、そうした伝説を保持していること自体、「無知蒙昧」であると否定的な評価が下される。その上で「迷信」打破を目指すのがここでの筆者の

姿勢だ。

むろん、こうした否定的評価だけにとどまるわけではない。早くから新潟県での郷土研究に取り組んできた中野城水が、大正九（一九二〇）年に上梓した『伝説之越後』のはしがきを見よう。中野は「伝説は歴史でもなく、またお伽噺でもありません、民衆により築き上げられた一種夢幻的の美しい話の塔であります、雪の越後は其塔の豊かな国であります」と積極的な位置付けを与えている〔中野 一九二〇 はしがき〕。大正一三（一九二四）年刊行『越佐伝説夢を買ふ話』の著者、石原亨は当時長岡中学校の教諭。所収の伝説は生徒への課題からのものである。だがこれは調査として課したのではなく、夏期休暇の作文の宿題の一環だった。集まった伝説について、石原は「悉く昔の人々の趣味の自然に滴つて凝固したもので、さながら居間に於て内証話を聞くが如く、また秘親展の手紙を見るやうな床しさと優しさとを持つてゐるものばかりでありました」と感想を記す〔石原 一九二四 一三〕。『夢幻的の美しい話の塔』あるいは「昔の人々の趣味」が凝固したものといった位置付けのもとで、伝説は肯定的な扱いを受けている。

伝説に対して肯定的、否定的いずれの立場から関心を寄せるにせよ、そこに体系だった調査への試みがなかったのが当時の実情だ。長岡中学校の石原にしても、伝説提出を生徒への課題としたのは「各自其知つてゐる興味ある事柄をありのままに書くのだから、頭の痛くなることもなく、また肩の凝るやうなこともあるまい」といった考えからだったと述べており、方法に対して意識的な調査ではなかったことが読み取れる〔石原 一九二四 一〕。またここであげた三冊いずれも伝説を何らかの形で分類することなく、かつ配列の基準も明確ではない。出典についての情報もあいまいである。

『北安曇郡郷土誌稿』の「口碑伝説篇」で試みられた伝説の調査法、

また資料的位置付けは、こうした状況の下、本格的な調査研究の嚆矢として民俗学を志そうとしていた者の目に映じたことは間違いない。『西頸城郡郷土誌稿』の「口碑伝説篇」には『北安曇郡郷土誌稿』の影響が色濃い。前者では全体が大きく一に分けて分類されているが、その項目は後者の全一四分類から「山人の生活、巨人伝説其他」「雨乞の話」を除き、また「池、淵、泉等の話」と「治水伝説其他」を「水の話」として一括して作成されている。また『西頸城郡郷土誌稿』の凡例に示された「文章は修飾を極端に避け、話の要素だけとする方針」「今回の企は直接伝承者からの採集を要望した」といった点は、『北安曇郡郷土誌稿』のための調査にあつたのポイントとして示されていたものと同じだ。

『西頸城郡郷土誌稿』は民俗学関係の雑誌で高い評価を得ていく。「第一冊」は『民間伝承』誌上で「従来の文献的郷土誌に慚らず民間に伝承せる隠れたる事実の発掘によつて、新なる道を見出さんとして企てたもの。（中略）次々に他の領域の採集が公表せらるることを期待する」と、関敬吾によつて好意的に取り上げられた〔関 一九二七 八〕。地元新潟県の『高志路』での紹介は、小林存。小林は『郡郷土誌稿』がとつた分類に対して「科学的に排列されてゐる点はこれが決定的のものであるかどうかは分らないが全く参考になる」と評価。さらに青木ともども参加した日本民俗学講習会の効果は大きかったとし、「斯学にしては未開拓の分野として知られた本県にもその訓練によつて此の如き郷土研究の良教科書が生まれた」と締めくくった〔小林 一九三六 三二〕。従来の文献的郷土誌と一線を画した、民間伝承による郷土研究のよきモデルとしてこの書は受け止められていく。

柳田国男は一貫して人物史観、また事件史中心史観に対して批判的な姿勢をとつたことは周知の通りだ。大正三（一九一四）年に『郷土研究』誌上に掲載された「郷土誌編纂者の用意」で、柳田は当時の郷土誌・史

類をその序文から四つに分類している。第一は旅行者を読者層とした遊覧案内、第二は愛郷精神の涵養を計ろうとするもの、第三は風雅人の手になる神社仏閣、古碑、歌名所の類に偏った内容を持つもの、第四に郡や教育会といった資力のある団体が始めだした新しい計画に基づくものである。柳田はこの一文の末尾で郷土誌・史作成にあたってのポイントとして、「年代の数字に大なる苦勞をせぬこと」「固有名詞の詮議に重きを置かぬこと」「比較研究に最も大なる力を用ゐること」といった点を挙げ「柳田 一九一四 一一五―一一七」。郷土誌・史の作成にあたって柳田が警戒したのが「お国自慢」であり、そのために比較研究の重要性が強調される。その姿勢は以後も一貫して続く。佐藤健二はこの「郷土誌編纂者の用意」を例として、柳田にとつて郷土研究の実践とは郷土自慢を反省的に乗り越え、自文化中心主義の自閉を批判しうる比較や論理の力を備えるべきものだったと述べている〔佐藤 二〇〇二 六九〕。文字による伝説の固定化に批判的で文字化されたものを絶対化する姿勢を退け、伝説の比較研究の重要性を説く柳田の姿勢も、まったく同じ文脈で位置づけられるべきものであろう³⁾。

すでに述べたように『郡郷土誌稿』での奴奈川姫をめぐる記述は、あえて『古事記』に整合する年代へと付会するのではなく、また同じ場所をめぐる義経が登場する異伝を併せて示すといったように、固有名詞の詮議に陥ることのない方法が実践されていた。それは人物史観とはおよそ異なつた観点からのものである。柳田が唱えていた郷土誌・史作成にあつたポイントが踏まえられての内容となつていことがここには明白だ。『民間伝承』の「紹介と批評」欄に『郡郷土誌稿』第二冊が取り上げられている。紹介者の倉田一郎は「この種の資料が単なる説話研究の資料ではなく、民俗学上多方面に貢献する資料を挾雑してゐる遺物層や貝塚であるといふ感が愈々ふかい。これを発掘せんとする者は、

これを更に分類整理して、その資料がもつゲシユタルト、その資料が組み入れらるべきクロノロギーを明かにすることを第一の前提とするのでらう」とし、本書がその貝塚の一つであると述べて文章を締めくくる〔倉田 一九三八 八〕。「貝塚」「遺物層」という比喩はけつして不適切なものではない。偉人英傑の事績を列挙するだけのような郷土自慢の自閉に陥ることなく伝説を比較の方向へと開いていくこと、また読み手にとつてそれが可能となるような資料の提示をすること、それがここでの比喩へとつながっていく。『郡郷土誌稿』は、郷土誌・史の記述のスタイルとして、従来にないものであった。

三 新潟県での郷土研究の展開

『郡郷土誌稿』は当時の状況にあつて、どのような位相に位置していたのだろうか。そして柳田国男の方法は新潟県内での郷土誌・史の作成にどのような影響を及ぼしていったのだろうか。この問いに対して、民間伝承と文献史料との対比という資料のあり方をめぐる構図の中でまず、論じることにはしたい。

『民間伝承』誌上で関敬吾が「従来の文献的郷土誌に慊らず民間に伝承せる隠れたる事実の発掘によつて、新なる道を見出さんとして企てたもの」と『郡郷土誌稿』を評価していたことはすでに触れた。ここでの評価の基軸は文献的郷土誌に対する民間伝承の発掘という点にある。この「民間伝承の発掘」という方法のはらんでいた射程は、当時のメディア状況のなかではどのようなものだったのだろうか。柳田はほぼ同時期、伝説研究と併行して民謡についての研究も進めていた。柳田の民謡論を同時代のメディアとの関わりで位置づけ、その意義を論じたのが武田俊輔である。武田によれば、柳田自身の民謡、すなわちオーラルな（声）

の発見は、それ自体印刷メディアの力に依拠したもので、活字化された民謡集といったような〈文字〉の位相の上に成立しており、その事を柳田は強く自覚していたという。その上でオーラルな「民謡」という領域を仮説的に設定することを選択していた。柳田の「印刷文芸」への批判は、その自覚の上でこそ行われていたと武田は指摘する〔武田 二〇〇二 四八〕。柳田の伝説研究も伝説集という〈文字〉の位相、さらにツーリズムおよび近代の交通事情といった状況を強く意識したものであろうし、その上でオーラルな「伝説」さらに民間伝承という領域を仮説的に設定していたと見るべきであらう。

したがって実態としては文字資料とオーラルな伝承とは必ずしも資料として断絶したものでなかったといわねばならない。実際、当時の文献的郷土誌とみなしうるものでも、その歴史記述にあたっては、ある時点までオーラルな資料を多用していたのである。再び『郡誌』を例にとろう。奴奈川姫に関する記述で伝説が資料とされていたことはすでに見た。それに加えてこうした資料が数多く活用されていたのが「地理篇」の「第八章町村開発」だ。

郡内各町村の開基について紙数を割くこの章の、たとえば上早川村寒谷を見た場合、「開発の時代詳ならず、土俗は云ふ、昔茲に山嬭と称するものあり、三子を生む其子孫繁殖して部落をなす、これ即ち寒谷開発の祖と称す」といった書き方がなされている。筆者は続けて「蓋し当時の山嬭と称するもの多くは他国より流落して来るものを云ふならん」と、その合理的解釈を続けているものの（郡誌、一四九ページ）、ここでは伝承による記述が柱となっているのが読み取れよう。他の町村の場合でも同様で、本文の記述からは「口碑に伝ふ」「口伝」「言伝ふ」「伝へ云ふ」「伝ふる処」といった、資料がはらむオーラルな性格を表す語句が数多く見出せる。

こうした資料を補助的にはあれ使用して史実を再構成しようとする姿勢の背景の一つとして、当時入手可能な文献史料の限界という事態を指摘しなければならぬ。『郡誌』の本文中では活字化された文献史料が使用される都度、その史料集名が括弧書きで記載されている。そうした史料集の刊行状況を見ると、昭和初期の郷土史研究を支え、あるいは制約していた状況の一端が浮かび上がってくる。

『郡誌』やさらに当時県内で上梓された郷土誌・史類で多く参照されている主な史料集の刊行時期は、ほぼ大正期以降それも昭和に入ってからのこととなる。その刊行状況を見ると、江戸時代にまとめられた地誌で主だったものの一つ、『越後名寄』が前後編に分けて活字化されたのは大正五（一九一六）年。『越後野志』上下巻と『北越雜記』は昭和一一（一九三六）年。また明治二三年から二六年にかけて雑誌形式で刊行された『越後志料 温古之葉』が、版組みを変えて「複版」として再刊されたのも同じ年である。その序文で相馬御風は「近年郷土研究熱が頓に高まり、中央に於てはいふに及ばず、全国各地に之に関する種々な企てを見るやうになつた。これは文化の進展と共にわが国民が始めて真に郷土生活にめざめ、郷土と自己との関係を自覚し、その心を以て真によく郷土そのものを見直さうとする機運に立ち至つた結果」だと記す〔相馬 一九三六 一〕。郷土に対する関心の高まりは、これまで活字化されることになかった史料の翻刻、刊行へとつながり、そうした史料に接することはかつてよりもはるかに容易となつていく。

活字メディアによる文献史料の広範な流通という点だけではなく、この時期の特徴として指摘すべき点はより精緻な史料批判を踏まえての刊本化が図られるようになった点である。明治期に刊行された『温古之葉』は郷土研究の先駆的存在という評価がなされた一方、出典を明示せず、また数字を誇大化し、執筆者大平与文治の戯文的筆致は内容のずさんさ

を印象付けたというように、史料操作の面で問題があったのも確かである〔井上 二〇〇三 三三〇〕。だが次第に適切な史料批判を踏まえた成果が刊行されるようになる。明治三三（一九〇〇）年から七年がかりで完成した吉田東伍の『大日本地名辞書』は、当時閲覧がはなはだ困難であった宮内省や内閣文庫所蔵の資料をも駆使し、現在でも歴史地理研究にとつて最も基本的な図書と評価されているものだ〔千田 二〇〇三 六、一三八〕。さらに高橋義彦によって編纂され大正一四（一九二五）年から刊行され始めた『越佐史料』全六巻は、東京帝国大学史料編纂掛による『大日本史料』に範を取り、体裁内容共にこれに準じて編纂されたものである。高橋は『大日本地名辞書』を編纂した吉田東伍の実弟で、兄の史料収集に協力したのを契機に編年体の『越佐史料』の編纂、発行に尽力するようになった〔井上 一九九八 五二〕。その評価は高く、たとえば黒田日出男は現在でも越後や佐渡の室町から織豊期の歴史を調べるにあたってもつとも有用な史料集だと位置づけているほどだ〔黒田 一九九六 一六八〕。

『郡郷土誌稿』が刊行された時期は、こうした文献史料が広範に活字化され、さらにその資料的操作が精緻なものへと化していく時期に該当する。文献史料が資料としての性格を確固たるものとしていく背景のもとに、民間伝承としての伝説という独自の領域が見出されていく。その点が実質的に大正期に執筆され、伝説も文献史料も同じ地平で資料として扱われていた『郡誌』とは大きく異なる。『郡誌』が編纂されていた時期は、いまだ文字化されたものとオーラルな資料との境界は曖昧な部分を残し、過渡期としての制約が大きかったといわねばなるまい。

新たに「民間伝承」という枠組みで見出された郷土へのまなざしは、どのように編成されていったのだろうか。『郡郷土誌稿』の編纂にあたった青木重孝も投稿者の一人だった雑誌『高志路』の動向を、主に柳田国

男との関わりから見ていこう。すでに触れたように『高志路』の創刊に携わった小林存は青木と共に、第一回の日本民俗学講習会に参加。その後、柳田およびその周辺の民俗学者との交流を深めていく。小林は明治一〇（一八七七）年生まれだから柳田国男より二歳、年少である。『新潟新聞』の主筆を一時務め、辞した後は高志社を大正五年に興し、『古志時報』という文芸週刊誌を発行。さらに『東北時報』にも評論を書き、広範な人脉を保持していた人物である〔川崎 一九七九 一一八〕。

柳田は大正九（一九二〇）年に一度、佐渡に訪れていたが〔池田 二〇〇一 二八七〕、研究という側面から本格的に新潟県に関与するようになったのはこの講習会以降となる。講習会の翌年、昭和一一（一九三六）年には早速、柳田が最上孝敬と共に新潟に招かれた。『高志路』五月号には「近來郷土の學術的再認識が盛んに説かれてゐるがその研究法或は資料の採集は既に完成されてゐるのであらうか、我々同人はこの問題を検討する為に来月下旬を期して一大講習会を開くことを計画」したと、読者に「郷土学研究会開催」の案内を呼びかける。折しも柳田の弟、松岡静雄が逝去したために予定は変更となり、結果として同志による座談会形式で柳田を迎えることとした。七月号掲載の「柳田先生御指導記」によれば、六月八日の座談会には師範学校、中学校、商業学校、小学校などの学校関係者を中心に四五名が参加。「従来の歴史は著名人物の伝記に外ならず国家国民発展の真相を知るに足りない」文献のみを主とすれば創始時代に限りがある、然るに民間伝承の探求により我々常民何千年間日常の経験に従へばこの問題は正に解決される。「郷土研究とは郷土人の郷土に於いて全国的学的問題に参加する意で郷土だけの郷土研究は価値がない」と柳田が持論を展開したことがうかがえる。

その後も昭和一三年には『高志路』を刊行する高志社の主催、県教育会共催で金田一京助、最上孝敬を講師とした郷土研究講習会が開催され

る。当日はアチック・ミューゼウムから濫澤敬三、岩倉市郎も参加し、出席者数八〇名以上を数える盛況となった(一〇月号)。さらに翌年は『高志路』創刊五周年記念を兼ねた講習会が、橋浦泰雄を講師として開催に至る。また『高志路』の誌面を見ると鈴木棠三や宮本常一他の民俗学者が新潟を訪れては高志社主催の例会に参加し、また直接新潟に来訪することがなくとも『高志路』に文章を寄せるといったように、多彩な交流が図られていたのが読み取れる。

東京での日本民俗学講習会、『高志路』が主催する各種の講習会を通して民俗学が教員層に波及していったこの当時、講習会というメディアは教員層に対して多様な形で開かれていた。第一回の日本民俗学講習会があった昭和一〇(一九三五)年の『越佐教育』から、夏休みを控えた七月号の誌面を例に取ろう。ここでは「新潟県郷土地理・歴史夏季大学」以下、一三ページにわたって合計一七もの県内外での各種講習会の案内が掲載されている。このうち「郷土史」を銘打ったものは二つ。先の「新潟県郷土地理・歴史夏季大学」では「郷土は吾等の人格、全精神、全身体を培ふものとして大いなる教育的価値を内在し、その研究は教育の基礎的労作として是非なされねばならないものと考へられます」と、その趣旨を述べる。さらに「郷土研究を当面の急務と考へ一層の努力を致さねばならない」とその重要性を読者に訴えかけた。主催が新潟県教育会や中頸城郡教育会、新潟県郷土研究会ということから、この企画は県教育会を挙げてのものだったことがうかがえよう。講習会というメディアが広範な教員層を巻き込み、さらに郷土研究への関心が高まるという時代状況のもとで、柳田や小林の講習会を通じた取り組みは受容されていたことになろう。

そうした取り組みはたんに講習会だけではなく、教員を通しての民俗調査の実践へと結実していく。昭和二三(一九三八)年には小林存が中

心となって編集された『郷土研究入門手帳』が刊行。七月号での紹介によれば、全百の質問項目から手帳は構成されており、一項目ごとに見開きで調査結果が記入できるようにになっていた。明らかに柳田が指導した「山村調査」で使用された手帳の形式を踏襲したものだ。この記事では新潟師範学校、新潟高等女学校、新潟市教員郷土研究会で手帳を相当数買い上げ、夏期休業中の課題として調査を実施する旨、述べているので、学校機関を通じた組織的調査が刊行の前提とされていたことが読み取れる。

四 郷土誌・史の編纂への柳田の影響

『高志路』を中心とした動向は、県内の郷土誌・史の編集にあたって何らかの影響を及ぼしたことは間違いない。その主催する講習会参加者やまた『郷土研究入門手帳』の想定読者が主に県内教員層であり、同時に郷土誌・史の編集にあたるのも多くが教員だからである。昭和一一年、新潟市に柳田を招いての座談会出席者は『高志路』記事によれば四五名。出席者一覧を見ると一一名を除くすべてが教員で、市内の高等女学校校長他、校長が合計五名そこに含まれている(七月号)。また昭和一三年の郷土研究講習会でも八〇名を超える参加者のうち、五〇名弱が教員となっているように『高志路』は教員層に深く食い込んでいた(一〇月号)。また学生による調査も活発になされ、その成果が『高志路』にも掲載されている。一九三〇年代になると柳田が地方の民俗学運動の担い手として期待する職業階層は、地方名望家から小学校教師へと変化していく。一九三五年以降本格的に成立した民俗学運動は、全国各地の小学校教師を中心とする会員を通して資料を全国的に洩らすことなく収集することによって「国民生活変遷誌」の実証的解明を目指す国民性ナショナルイティの再構築運動で

あつたと小国喜弘は位置付ける〔小国 二〇〇一 三二一〜三四〕。

とはいえ郷土誌・史の作成の実際の場面になると、柳田の提唱した方法が及ぼす影響は限定的なものとならざるを得なかつたのも事実である。昭和二年の『高志路』四月号の「郷土誌展望」はそうした一端を示すものだ。記事冒頭は「最近郷土誌研究熱の勃興したことは喜ぶ可きことに相違ないが兎角我々の希望するやうな常民生活史の出ないことは遺憾千万であります」と述べる。そして『西頸城郡郷土誌稿第二冊』他、現在編纂中の郷土誌・史をいくつか紹介し、期待を寄せる。しかし締めくくりは「各小学校内にもかうして見ると優秀な研究者がないことではないのだが新しい方法論の未だ普及して居らず左様いふ人達の苦勞を空しうしてゐることは残念だと思ふ」といった言葉とならざるをえないところに、この当時の状況が端的にうかがえよう。

この記事で「小国小学校の小国誌は材料の多い土地柄といへ同志長谷川正君が指導されたといふから之を刮目して見るの価値あるものに相違ない」と紹介されている長谷川は、新潟商業学校の教諭。昭和十一年、柳田が新潟に來た折の座談会に出席したこと、さらに小林存の勧めもあつて、同年、国学院大学で開催の第二回日本民俗学会講習会に参加した人物である。講習会の感想として「文献で語られない領域を自然科学者の様な精密な観察調査によつて明らかにされてゐる真摯な努力に対しては全く敬服した」と述べた長谷川は、「この民俗学的研究によれば吾々の郷土研究の活動分野はズット拡大される事になる」と続けている〔長谷川一九三六 五二〕。『高志路』に集い民間伝承の研究に心を寄せる者の中でも、とりわけ長谷川が強く興味を抱いていたことは間違いない。

この長谷川が編纂に加わつたのが、小国教員協議会による編集の昭和十二年刊行『小国郷土誌』およびその翌年上梓の『小国郷土史』である。先の「郷土誌展望」がこのどちらを念頭に置いていたかは詳らかではな

いが、いずれにせよ小林存らによつて刊行が待望されていたことは確かであろう。とはいえその内容は、結果として見ればいずれも従来の郷土誌・史の構成を大きく踏み越えるものとはならなかつた。

先に刊行された『小国郷土誌』の「序言」を見て、「内容は郷内小学校の教職員総動員で各村の文献を蒐集し持ち寄つたものを、更に各章各章に分担して整理したものである」と、編集作業が文献中心のものであつたことを記し、ことさら新たな方法による郷土誌・史の作成が目標ではなかつたことを明らかにする〔小国教員協議会 一九三七 序言〕。全体の構成も「第一章区域」「第二章地形・地質・気候」以下、「第五章産業」「第六章交通」「第九章神社と宗教」といったように、全二二章の章立ては当時の平均的な郷土誌・史のものと変わらない。民間伝承という観点からは「第十章史蹟及伝説」、「第十一章民俗」という項目が目を引く。とはいえ「史蹟及伝説」という項目自体は特に目新しいものではない。また「民俗」という章立ての名前は目を引くものの、内容は「服装」「年中行事」「冠婚葬祭」といったもので、従来たんに「風俗」「土俗」として章立てされていたものの内容と全く変わらない。

翌年の『小国郷土史』は前年の『小国郷土誌』が取り扱わなかつた歴史的事項に比重を置いた内容のものである。民間伝承関連の事項について触れたのは「第十一章小国郷の常民生活」で、内容は大きく「慣習」「口碑・言語」「小国常民の気風」に三分される。「慣習」で取り上げられた項目は「暮らし向きの善し悪し」「村に入る物資」「村の組織・制裁」「村の大事件」といったように、「山村調査」で使用された『採集手帖』掲載の項目に明らかに準拠したものが目に付く。この章を執筆した長谷川は「教育普及せずして文字を知らなかつた昔は、大抵の事は口頭伝承であつた。これは長年月の語り伝へられたものであるから、村の生活に欠く可からざるもののみ残つてゐる」と、民間伝承の意義を強調する〔小国教員協

議會 一九三八 二五七」。その意味で、『小国郷土誌』での記述から大きく踏み込んだものとなった。とはいえこうした観点から記述された章は、全一二章のうちの一章に過ぎなかったことも確かである。この書全体の位置づけは、従来の郷土誌・史に柳田の提唱する視点を一部、加味したものである⁵⁾と云うのが妥当であろう。

『小国郷土誌』の紹介が『高志路』昭和十二年七月号に掲載されている。斯学を理解ある長谷川新商教諭の指導だけ由来のものに比して流石に一頭地を抽いた編纂方法ではあるが各部間の担当者が果たして教諭の真意を呑み込んでゐたかどうかは疑はしい」と述べ、「本誌ばかりに就いていふのではないが郷土誌といふものの中心を何処に置いて編纂するかは各自大に考ふ可き処であると信じる」と苦言を呈して紹介は締めくくられる。民間伝承の重要性を意識しながらも、全体構成には十分に反映しきれなかった本書への批判と見るべき言辭であろう。

実際、この二つの郷土誌・史が目指した方向は、長谷川が編集作業で大きな役割を果たしたとはいえ、柳田の主張とは大きく異なつたものだったことがその内容からうかがえる。『小国郷土史』の序言ではまず「郷土の優秀性は、之を歴史的に考察して愈々その本質が明確にされる」と、柳田が批判する「お国自慢」的な言葉が示される。その優秀性は「七百年の昔源氏の一族小国頼連の領有となつて以来その庇護によつて開發發展したる事、頼連の子孫政光は本郷を拠点地として越後に於ける吉野朝第一の忠臣として能く純忠を守りし事、小国氏の一族大脇氏は謙信の兵学顧問となつて謙信をして天下に覇を唱へしめし事」といった先人の活躍によつて明らかだ。さらにその後、明治以後にいたつても数々の偉才英傑を輩出したことが郷土の優秀性を確証するのだと、筆者は続ける（小国郷教員協議会 一九三八 序言）。そうした偉才英傑の活躍を重視する記述の姿勢は、これもまた柳田が従来の史学の弊害として問題としたも

のである。全体の章立てを見ても「第三章小国氏と小国保」「第四章豪族及城址」「第七章人物」といったように、人物中心の記述が続く。

冒頭の「凡例」に「本史に於ては能ふる限り郷土史実に対する批判・解釈を試み」とあるように、この時期、郷土誌・史の編纂にあつて史料批判は作業上、不可欠のものとなつていたことがうかがえる。大正期の執筆になる『西頸城郡誌』のような、『古事記』の記述にそのまま地域の歴史像を当てはめるような姿勢はここにはない。『小国郷土史』がとつた民間伝承を取り入れようとする観点も新たなものだった。だがその一方、記述の比重はあくまでも人物史観的な歴史像の構築にあつたことも明白だ。

柳田はこの書に対してどのような評価を下していたのか。柳田の読書方法について石井正己が成城大学などに残された旧蔵書から、その一端を読み解いている。それによればある時期から書物を読みながら赤インクで「×」や「▽」等の記号をつけ、様々な事項を記入するようになる。そうした書入れからいづれ論述しようと思ふ語彙や事項を拾つて、カードに転記するようにし、カードはテーマ別に封筒に入れていたのである（石井 二〇〇四 二一四）。成城大学の柳田文庫には『小国郷土誌』はないものの『小国郷土史』が蔵書されており、その表紙裏には「謹呈 柳田先生 長谷川正」と書き込まれている。だが本文に目を通すと、何一つ記号や書入れはない。石井によればこの時期は先のような読書法を実践している時期であり、断言はできないものの書入れがなければ柳田は目を通すことなく、またそうした書物には否定的なスタンスを取つていたことが予想されるという。

新潟県で見た場合、民間伝承に着目した調査は、たとえば『郡郷土誌稿』がそうであったように「口碑伝説」等、個別の事項を対象とした場合、実績を上げつつあった。だが郷土誌・史全体を統括する方法として

は、不十分なまま敗戦を迎えることになる。日本民俗学講習会に参加し、民間伝承の研究に強い関心を寄せた長谷川正が編纂に尽力した『小国郷土誌』『小国郷土史』をとってみても、郷土で顕著な活躍をした人物の事績を中心とした記述に結局、収斂していく。柳田の提唱した方法は、部分的な採用に止まり、かつそれも当時の郷土誌・史のなかでごく一部の限られたものでしかなかった。

それは郷土それ自体ではなく、その比較と総合を重視する柳田国男の方法がはらんでいた必然的アポリアにも起因しよう。柳田は大正期以降、信州でいくつかの郷土誌・史の編纂事業に関与していた。『諏訪史』の編纂事業もその一つで、事業は大正七（一九一八）年から開始。柳田はこの年、正式に顧問に就任し、また『諏訪史』第四巻の執筆予定者にも名前を連ねることとなった。だがこの巻はついに刊行されずに終わる。その理由として伊藤純郎が最も注目すべきだとして挙げているのが、郡史編纂という歴史研究の中で郷土研究が「傍系的研究」「補助的研究」としてしか位置付けられていなかったということだ。だが本稿の観点からいえば、伊藤の挙げる他の理由のうち郷土研究資料の扱いをめぐる問題が重要だ。柳田は採集した資料を他の地方のそれと比較、総合した上でないと農村生活史は書くべきではないと主張する。だがそのための方法には解決すべき課題が残されていたと伊藤はいう（伊藤 一九九八 三六〇―四〇）。『北安曇郡郷土誌稿』をめぐる柳田と一志茂樹との対立にも、こうした方法的困難という事態が背景にあった。柳田は既刊の出版物に掲載されている口碑伝説を皆、省略するように求めたが一志はこの見解に異を唱える（一志 一九八四 一七六）。年中行事篇でも同様で、その理由として一志は「北安曇地方といふ郷土社会の生活の中に、民俗がどのやうに生き、どのやうな文化的基底を形造ってきたかを極めたいことに主眼があった」と述べている（一志 一九七五 三三）。柳田の方法を貫

こうとすれば、一つの地域を単位とした郷土誌・史自体が成立しなくなりかねないというアポリアがここにはあった。

最後に

本章ではまず『西頸城郡誌』と『西頸城郡郷土誌稿』の二つを取り上げ、奴奈川姫をめぐる記述を対比させた。前者では文献史料や伝説を同じ位相のもとで資料として扱い、奴奈川姫と大国主神を軸に据えた歴史記述を図っていた。それは『古事記』を通して郡内の伝説や神社の存在をナショナルな歴史へと接合する営みでもあった。また人物を中心とした歴史記述は、ここだけではなくこの書全体を貫く方法であった。それに対して柳田国男の影響下にまとめられた後者では、異伝やさらに『古事記』と整合しないような伝説も集録し、またモノを中心とした分類とされたために伝説中の固有人名が重視されることはない。一足飛びにナショナルな歴史へと接合することを避け、全国との比較を前提としたその記述は『郡誌』の記述方法とは全く異なるものだ。

『西頸城郡郷土誌稿』の編集作業を実質的に担ったのは青木重孝である。青木は第一回日本民俗学講習会に参加。その折、郷土研究雑誌『高志路』を刊行していた新潟市の小林存と面識を持つ。『郡郷土誌稿』は柳田の指導のもと、『北安曇郡郷土誌稿』の影響を強く受けてまとめられた。『北安曇郡郷土誌稿』は体系的かつ組織的な調査を基に作成され、それを意識した『郡郷土誌稿』も高い評価を得ることとなった。柳田の伝説、さらに民間伝承に対する研究方法の提唱が具体的な実践となつて完成されたのが、この両者である。

新潟県内では『西頸城郡郷土誌稿』の上梓と相前後して、郷土研究雑誌『高志路』を中心として民間伝承の研究熱が高まりを見せつつあった。

柳田やその周辺の民俗学者が講習会講師として新潟を訪れ原稿を寄せるだけでなく、独自の『郷土研究入門手帳』が編集され、学校教育の場を通して組織的な調査も実施されるようになる。当時、教員層を対象に多様な形で講習会が開催され、講習会というメディアを通して民俗学に関する運動も編成されていった。

そうした活動の一翼を担った新潟商業学校教諭の長谷川正が編纂の中心となったのが『小国郷土誌』および『小国郷土史』だ。そこには民間伝承に配慮した章も盛り込まれていた。だが全体的なトーンは「郷土の優秀性」を明らかにし、偉才英傑の事跡に比重を置くといったように、むしろ柳田が批判してきた方向のものとなった。柳田が提唱した民間伝承の研究は、従来の史学への批判として打ち出されたものだった。だがその方法による包括的な郷土誌・史が戦前、まとめられることはなかった。それは柳田が提唱した方法自体が内包していたアポリアに起因していたことも確かだった。史料批判という点からは大きな進展を見せた当時の郷土誌・史における歴史記述は、人物史観的な観点からのものが主流のまま敗戦を迎えていく。そうした歴史記述をめぐる方法の拮抗関係が、『西頸城郡誌』と『西頸城郡郷土誌稿』の記述、さらに小国での郷土誌・史の記述には端的に表出されている。

(1) 青木はこの講習会の前年、昭和九(一九三四)年に開設された新潟県国民精神文化講習所が同年に実施した第一回講習会の参加者二八名のうちの一人である。この講習所は憂慮すべき「思想問題」に対応すべく、「徹底的ノ指導的施設」たるべく設置されたものである。その目的は「国体觀念ヲ明徴ニシ日本精神ノ真義ヲ闡

明ニシテ以テ之ガ教育施設ノ上ニ具現スルコトヲ期スルコト」であり、「教育関係者ニ対シテ思想問題ニ関スル正鵠ナル批判力ヲ附与スル施設ヲナスコト」が目指された。四週間にわたった第一回講習会での自由研究で青木が提出した論文名は、「日本精神の具現者元田永孚先生」〔新潟県国民精神文化講習所 一九三五 四〇一〜四二一〕。なおこの講習会の参加については、『青木重孝遺文集』掲載の自筆年譜では触れるところがない。いずれにせよ当時、教員層に対して講習会という形態のメディアが多様な形で開かれていたことを、この件は示す。

(2) ここでの分類は、戦後昭和二五年、柳田国男の監修のもとで刊行された『日本伝説名彙』での分類の原型となるものと見てよいだろう。柳田の指導のもとになったとはいえ、この点でも『北安曇郡郷土誌稿』は先駆的な位置付けを占めるものとして評価されなければならない。

(3) 佐藤のここでの論点は柳田の方法を性急に国民創出のためのプロジェクトとみなす論議への批判である。国民国家論で批判的に取り上げられる「周圏論」や「重出立証法」は「民俗」や「方言」を郷土自慢に内包させてしまう個別主義的な認識の割拠を批判する、比較という思考の一つのテクノロジーだとする佐藤は、郷土研究が主体に要請した身振りが単純な統合への同調ではなく、何よりも疑問への参与であり、反省の発見だったという〔佐藤 二〇〇二 七〇〕。本稿での例を再び示せば、記紀神話に地域の伝説を性急に結びつけて自らの歴史を国家の歴史へ収斂させようとする『郡誌』の記述のあり方のほうが、よほど「国民創出のプロジェクト」に即したものだといわねばなるまい。

(4) 近世における越後での地誌刊行状況については、吉田春太郎の

論考を参照されたい〔吉田 一九五六〕。

- (5) 小国での二つの郷土誌・史と同じ年に上梓された県内の他のものでの扱いはどうなっていたのだろうか。昭和十二年と十三年刊行のものは管見のところ、四点。昭和十二年の『三島郡誌』での章立ては「風俗」、同年の『金泉郷土史』では「土俗」、昭和十三年の『二宮村志』では「風俗習慣」、『姉崎町史』では「風俗及伝説」とそれぞれ銘打たれており、内容を見てもことさらに柳田国男あるいは『高志路』で提唱されていたような観点が加味されているわけではない。それ以前からある郷土誌・史の章立てと内容をそのまま踏襲したものである。

- (6) 同じような観点から柳田の方法を批判したのが山口麻太郎だ。山口は「山村調査」の報告書『山村生活の研究』について「個々の生活事象は村の生活から遊離して取り扱はれ、村の性格は考慮する事なしに資料価値が決定せられ、各個の郷土生活事象は生活の基地を離れて研究所の試験管に並べられて居る様な気がする」と、方法的疑義を呈した〔山口 一九三九 八〕。こうした批判は戦後、地域民俗学を主導していった福田アジオに継承される。たとえば福田は全国から資料を集積してその類型化と比較を通じて「変遷」を明らかにする従来の民俗学の性格上、各個別地域での民俗調査はこの資料集積のための手段に過ぎず、その地方を対象としているわけではない、その点で地域の課題を歴史的に明らかにする地方史とは全く異なる存在だと述べている〔福田 一九八四 一〇五〕。柳田が伝説個々に具体的に触れた昭和四年刊行の著作、『日本神話伝説集』では「咳のをば様」「驚き清水」「大師講の由来」「片目の魚」といった章立てのもとに、全国の伝説を収載、比較して民俗学的な観点から解説を加えたものである〔柳田 一

九二九〕。この書の末尾には道府県別に伝説の索引が付せられ、地名をもとにこの書を読み解くことを可能とさせている。しかし個別の地域ごとの伝説のあり方それ自体に柳田の関心があつたわけではない。『北安曇郡郷土誌稿』『西頸城郡郷土誌稿』は柳田の指導のもとに成立したとはいえず、柳田自身の伝説研究の重点は地域ごとの民俗誌の作成になつたことは明らかであろう。柳田の方法自体に、避けがたい矛盾があつたのである。

- 青木重孝 一九六三『高志路』と私『高志路』二〇〇号
 青木重孝 一九九五『青木重孝遺作集』私家版
 池田哲夫 二〇〇一「昭和初期における佐渡の民俗研究体制―倉田一郎の佐渡調査前後」福田アジオ編『柳田国男の世界 北小浦民俗誌を読む』吉川弘文館
 石井正己 二〇〇四『物語の世界へ 遠野・昔話・柳田国男』三弥井書店
 石原 亨 一九二四『越佐伝説夢を買ふ話』加藤書房
 磯前順一 一九九八『記紀神話のメタヒストリー』吉川弘文館
 一志茂樹 一九三七「卷末記」信濃教育会北安曇部会編『北安曇郡郷土誌稿第七輯 口碑伝説篇 第三冊』信濃毎日新聞社
 一志茂樹 一九七五『北安曇郡郷土誌稿』年中行事篇第一冊の刊行をかへりみて『日本民俗誌大系第六巻』『月報第7号』角川書店
 一志茂樹 一九八四『地方史に生きる 聞き書き一志茂樹の回想』平凡社
 伊藤純郎 一九九八「信州郷土研究事始め―柳田国男と諏訪史編纂事業」『信濃』第五〇巻第一号

伊藤純郎 一九九「課題なき調査、予断なき採集」『北安曇郡郷土誌稿』編纂事業と「国民俗学」大濱徹也編『近代日本の歴史的地位 国家・民族・文化』刀水書房

井上慶隆 一九九八「高橋義彦と『越佐史料』」『自然と文化』第五八号
井上慶隆 二〇〇三「温古の葉の先後をさぐる」『高志路』第三五〇号

小国教員協議会編 一九三七『小国郷土誌』小国教員協議会
小国教員協議会編 一九三八『小国郷土史』小国教員協議会

川崎久一 一九七九『小林存伝 日本民俗学の先駆者』野島出版

倉田一郎 一九三八「西頸城郡郷土誌稿(第二輯)」『民間伝承』第三卷 第五号

胡桃沢友男 二〇〇四『柳田國男と信州』岩田書院

黒田日出男 一九九六『謎解き洛中洛外図』岩波書店

小国喜弘 二〇〇一『民俗学運動と学校教育 民俗の発見とその国民化』東京大学出版会

小林 存 一九三六「西頸城郡郷土誌稿(批評)」『高志路』第二卷第一 二号

佐藤健二 二〇〇二「民俗学と郷土の思想」『岩波講座近代日本の文化史 5』岩波書店

関 敬吾 一九三七『新潟県西頸城郡郷土誌稿』『民間伝承』第二卷第 五号

千田稔 二〇〇三『地名の巨人吉田東伍 大日本地名辞書の誕生』角川 書店

相馬御風 一九三六「序」『複版「温古之葉」第一卷』温古之葉刊行会
武田俊輔 二〇〇二「柳田國男の民謡論」〈声〉からの近代批判の可能

性と困難『ソシオロギス』No.26

中野城水 一九二〇『伝説之越後』長岡日報

中原育堂 一九〇八「越後伝説四十七不思議解」葎葎堂

新潟県教育百年史編さん委員会 一九七三『新潟県教育百年史』大正・

昭和前期編』新潟県教育委員会

新潟県国民精神文化講習所 一九三五『新潟県国民精神文化講習所々報』

新潟県国民精神文化講習所

西頸城郡教育会 一九三〇〜三一『新潟県西頸城郡郷土誌稿 第一輯』

口碑伝説篇第一冊』第二輯 口碑伝説篇第二冊』(歴史図書社復刻版、

一九七八年刊行を使用)

西頸城郡教育会郡誌出版部 一九三〇『西頸城郡誌』(千秋社復刻版、一

九九九年刊行を使用)

長谷川正 一九三六「日本民俗学講習会のこと」『高志路』九月号

福田アジオ 一九八四『日本民俗学方法序説』弘文堂

松本三喜夫 一九九六『野の手帖 柳田國男と小さき者のまなざし』青

弓社

松本三喜夫 一九九八『柳田國男の民俗誌』吉川弘文館

柳田國男 一九一四「郷土誌編纂者の用意」『柳田國男全集第三卷』一

九九七) 築摩書房

柳田國男 一九二九『日本神話伝説集』『柳田國男全集第四卷』一九九

八) 築摩書房

柳田國男編 一九三五『日本民俗学研究』岩波書店

山口麻太郎 一九三九「民俗資料と村の性格」『民間伝承』第四卷第九号

吉田春太郎 一九五六「旧越後地誌類の成立」『越佐研究』第一〇集